

二. 佐藤紅緑の「滑稽俳句集」を読む

稲葉純子

紅緑の「滑稽俳句論」について

紅緑は「滑稽俳句集」の序文に「滑稽俳句集」編集企画の意図を次のように書いている。「滑稽の本質を看破せず、これに伴う句法の修練を積まずして巧みを粧うは善くない事である。換言すれば滑稽の句は、句作の老練と着眼点の選択を誤らぬようにならなければ逆も作っても駄目だという意である。① 滑稽の本質を理解しなさい②修練をつまずに巧みを粧ってはならぬ。そして肝心なのは『着眼点』である」としている。紅緑は「句作の老練」を言っているが「滑稽俳句」は「未熟な俳人」には出来ないと判断したようである。

また、紅緑は編集にあたり以下のことを念頭に置いたと考えられる。「滑稽の句は、一步を失すれば卑俗になり理屈になり厭味になってしまうおそれがある。江戸時代において、どの俳人も一茶には遠く及ばず、趣向と句調と相並んで能く、滑稽の至境に遊んだものは只一茶あるのみである」。

これは紅緑の師・正岡子規の唱えた滑稽俳句論と共通の認識である。

蠅一つ打てば南無阿彌陀佛かな 一茶

紅緑は一茶の業績を褒めながらも、「滑稽俳句」はもっと進化せねばならぬ、との大志を抱いていたようで次のように述べている。「明治の今日に於いて一茶如き単純なる句法は決して継続すべきものでないから、これらの一大文化を来すべき時機は眼前に迫っている」と。紅緑は、一茶の涎を舐めていては、新しい滑稽句は誕生しないだろうと、世の俳人を叱咤激励しているのだ。そして、当時の滑稽を分類することで新生面を拓こうと考えたようである。

明治における滑稽俳句

紅緑は「明治における滑稽句」について以下のように記している。「明治に引き継がれ最も滑稽句の多いのは流石に、子規と鳴雪の句作ではあるが、明治の新調として特筆すべきは、露月及び虚子の滑稽句である。露月が、漢語を活用して奇想を縦横に動かす事と虚子が狂体を好んで奔騰勅すべからざるとの二つは、

確かに開關以来、今日を以て嚆矢(こうし)とするのである」と。

蛇穴を出て孔子容れられず 露月

孔子の「孔」は「穴」に通じ、漢語を得意とした露月のしゃれの一句。

蜻蛉になぶられて馬の長き顔 虚子

子規の後継者としての虚子の滑稽は、さすがに「写生句」である。

紅緑は当時の作品を分析の結果、滑稽句二つの潮流として以下のように結んでいる。「この二潮流が明治滑稽俳句界を震盪(しんとう)して、新たに複雑なる趣向を捕らえ新生面を開くの時あるべきを深く希望して止まぬ」と。しかしながら当時、「俳句の滑稽」について紅緑が意識したほどに世の俳人は価値を意識したとは考えにくい。なぜなら「滑稽俳句集」はこの一冊限りで続く出版は皆無だからである。

紅緑の「新しい滑稽句を作ろう」の企画は、一朝一夕には実を結ぶことはなかった。しかし、この句集には、数多の作品が残されており、当時の俳人の滑稽感を理解することができる。

曲れるをまげてまがらぬ柳かな 其角

芋の葉や蓮かと問えばかぶり振る 也有

秋来ぬと目にさや豆のふとりかな 大江丸

お日さまを虫が喰ひけり秋の風 子規

さまさまに狸化けんとう夜長き 碧梧桐

達磨忌や達磨に似たる顔は誰 漱石

稲妻の不意に來りし眠りかな 紅緑